

よえもん

論語から学ぼう

(記念館の玄関前に掲示しています)

《 第71号 》 (2021年2月発行)

令和2年度特別展示
渋沢栄一と藤樹神社

シリーズ
よえもん



論語「里仁第四

書 淵田瑞穂さん

古者言を
之れ出さざるは
身の速ばざるを
恥ずればなり

渋沢栄一は、江戸時代の終わり、天保11年(1840年)に埼玉県深谷市で生まれました。家は大きな農家で、染め物の材料や、かいこから絹糸をとる商売もしていました。家業の農業と商売を手伝う一方で、幼いころから「論語」を学んでいました。

論語は、中国の孔子の話を書いたもので、人として正しく生きるために役立つ言葉がたくさん書かれています。中江藤樹も17歳のとき京都からきたお坊さんに論語を学び、勉強のやり方がわかったと言われています。大人になると栄一は、論語の教えを生かして経済のしくみを作り、「日本資本主義の父」と呼ばれるようになり、91歳で亡くなるまでに多くの会社を作りました。

大正9年(1920年)中江藤樹をまつる神社を建てようと、協賛会が作られ、建築費用10万円の募金を呼びかけました。栄一も陽明学に共感していたことから顧問になり、金1千円の寄付をしています。大正11年(1922年)藤樹神社が完成しました。

「昔の人たちが軽々しく言葉を口にしなないのは、自分の行いが言葉にともなわないことを恥じたからだ。」という意味です。

昔の人が、自分の言った言葉に責任をもって行動し、責任をもてない時は、むやみに自分からあれこれ言うことをしなかった様子をあらわしていると思われれます。

何かを話すときは、自分自身やまわりの人たちのことを考えて、「言葉と行動」に気をつけるようにしましょう。



藤樹神社



渋沢栄一 (藤樹神社所蔵肖像写真より)

* 記念館だより *

新年の節分を迎えます。季節の変わり目とともに、本当の「春」を待ち望みます。

節分を迎えます。節分は季節の節目である「立春、立夏、立秋、立冬の前日」のことをいい年に4回あります。旧暦では春から新しい年が始まり、立春の前日の節分(2月3日頃)は大晦日に相当する大事な日であったため、節分といえばこの日をさすようになりました。季節のわかれ目、年のわかれ目には邪気が入りやすいと考えられており、おなじみの豆まきも様々な邪気払いの代表的な行事です。鬼は邪気や厄の象徴とされ、この鬼を追い払う豆は、五穀の中でも穀霊が宿るといわれる大豆です。豆が「摩滅」、豆を煎ることで「魔の目を射る」ことに通じたので煎った大豆が使われ「福豆」の由来となりました。



近江聖人中江藤樹記念館

高島市安曇川町上小川69 TEL:FAX (0740)-32-0330